



中国のアウトサイダー

井波律子

筑摩書房



中国の アウトサイダー

井波律子

筑摩書房

著者紹介

井波律子(いなみ りつこ)

1944年富山県生れ。京都大学文学部卒業。現在、金沢大学教養部教授。専攻、中国文学。著書に『中国人の機智』(中公新書),『中国的レトリックの伝統』(影書房),『世説新語』(角川書店),『読切り三国志』(筑摩書房),『中国のグロテスク・リアリズム』(平凡社),訳書に『三国志』I, II (共訳, 筑摩書房) などがある。

中国のアウトサイダー

1993年4月25日 初版第1刷発行

著 者 井 波 律 子
発 行 者 関 根 栄 郷
発 行 所 蟹 筑 摩 書 房

東京都台東区蔵前 2-6-4
振替東京 6-4123
郵便番号 111

ISBN 4-480-83611-X C0098

星野精版印刷・鈴木製本所

© Ritsuko Inami 1993 Printed in Japan

ご注文・お問い合わせ、及び乱丁・落丁本の交換は下記へ。

〒331 大宮市櫛引町2-604 筑摩書房サービスセンター

TEL 048-651-0053

目次

I

伸縮自在のダイナミズム

中国的空飛ぶ術

中国の散財史

中国的な自伝について

『世説新語』の世界

「陽羨鵝籠」

「壺中天」のミクロコスモス

夢の話——「枕中記」

II

『列子』——その幻化の世界

司馬遷と『史記』の思想

漢・魏・六朝の文学——賦から五言詩へ

7 18 31 41 51 65 73 77 83 113 123

中国のアウトサイダー——張岱について

151

III

面白かった本

195

フリーック／松平いを子訳『古代中国の性生活』 井上

靖『孔子』 中野美代子『中国ペガソス列伝』『龍の住む

ランドスケープ』 今村与志雄『魯迅ノート』 高木桂

蔵『客家』 酒見賢一『後宮小説』 宮城谷昌光『夏姫

春秋』 辻原登『村の名前』 マルケス／鼓直訳『百年

の孤独』 中国文学の本——一九八九〜九二年

IV

論争家 魯迅^{ボレミック}

223

はじめに愛あらざれば——津田左右吉の中国研究

241

美文の精神——高橋和巳と中国文学

248

あとかき
初出一覧

I

伸縮自在のダイナミズム

中国的レトリックといえば、多くの人は「白髪三千丈」ふうの大きな表現を思い浮かべるであろう。確かに中国では、古来、誇張表現が好まれ、ここぞというポイントを強調するのに便利な方法として、しきりに用いられてきた。

誇張表現をもっとも巧みに用い、独特のイメージを作り出した詩人は、詩仙と呼ばれる李白（七〇一―七六二）である。「白髪三千丈」も、実は李白の「秋浦の歌」其の十五の一句にほかならない。

白髪三千丈 白髪 三千丈

縁愁似箇長 愁いに縁^よつて箇^{かく}の似^{ごと}く長し

不知明鏡裏 知らず 明鏡^{うら}の裏

何處得秋霜 何^{いず}れの処^{ところ}よりか秋霜を得たる

鏡に映った髪の中に、長く伸びた白髪を発見した李白は、歴然とあらわれた老いの徴候に衝撃を

うける。しかし、李白は弱気になるどころか、逆に、氣を減入らせる白髪を直視し、表現の上で開き直ってそれに極端な誇張を加える。かくて白髪は三千丈という無限に等しい長さに伸ばされ、あつという間に、等身大の世界——現実——を超越する。三千丈に伸びた白髪からひるがえって見れば、現実の一本の白髪など、問題にならないほど微小なものと化してしまふ。こうした一種の表現のトリックにより、李白は現実の白髪を無に等しいまでに縮ませ、自らの受けたショックをやりすごすのである。

こうした誇張表現の仕掛けは、李白の詩のいたる所に見られ、たとえば友人との別離を歌うさいも、彼はこう表現する。

金郷送韋八
金郷にて韋八の西京に

之西京
之くを送る

客自長安來

客は長安自り來り

還歸長安去

還た長安に帰り去る

狂風吹我心

狂風 我が心を吹きて

西挂咸陽樹

西のかた咸陽の樹に挂く

此情不可道

此の情 道う可からず

此別何時遇

此の別れ 何れの時にか遇わん

望望不見君

望み望めども君を見ず

連山起煙霧 連山 煙霧を起こす

韋八は都長安から、金郷（山東省）にいた李白に会いに来た友人。咸陽は秦代の首都、ここでは長安を指す。

友人との別れを悲しむ李白の心は、狂おしく吹く風に乗って、一瞬のうちに現実空間を飛びこえ、はるか西方、友人の目指す都長安へ先まわりして、かの地の樹に引っかかる。李白はここでも奇抜な誇張法の仕掛けを用いて、等身大の世界からイメージの上で飛び出し、現実の距離を一気に縮ませる。

これらは単純でもっとも見やすい例であるが、李白の場合、誇張法によって膨脹（白髪三千丈）もしくは強化（飛ぶ心）された詩的イメージは、素々と現実の時間的、空間的な枠を突き破り、その結果、彼の意に染まぬ現実のほうが卑小化される。比喩として何らかの要素が拡大、強調された結果、現実の間尺を越えてしまい、現実自体が縮小されるのだともいえよう。これは明らかに比喩（空想）と実体（現実）の比重の逆転にはかならない。さらにこの逆転が、「白髪三千丈」とか「狂風 我が心を吹きて、西のかた咸陽の樹に挂く」というふうな、奇想天外に行われれば行われるほど、ユーモラスな気分がもたらされる。李白はこうして感情のヴェクトルをも転換し、湿り気を帯びた悲哀の情を昇華するのである。

こうした誇張法による空想もしくは観念と現実の比重の逆転、さらにそれにとまなう感情のヴェクトルの転換といった方式は、中国の伝統思想から見れば、「無為自然」をモットーとする道家思想

想に顯著にあらわれる。ちなみに李白もまた、中国各地を遍歴して道士（道教の僧）と親しく交わるなど、道家（もつと土俗宗教化した道教といったほうがいいかもしれないが）的傾向の強い詩人であった。

李白が生きた時代から約五百年前の三世紀中頃の中国では、『三国志』の英雄曹操（そうそう）の子孫が立てた魏王朝はすでに勢いを失い、これに取って代わらんとする司馬一族が策略の限りを尽くす險惡な時代状況が繰り広げられていた。このころ、阮籍（げんせき）、嵇康（けいこう）、山濤（さんとう）、劉伶（りゅうれい）、阮咸（げんかん）、向秀（きやうしゅう）、王戎（わうじゆう）のいわゆる「竹林の七賢」と呼ばれる人々は、事多き現実から離脱して、道家思想の理念を実践に移し、大いなる自然と一体化することによって、身も心も解き放つことを願った。彼らは俗世の規範を無視し、その立身出世志向を嘲笑しながら、酒に音楽にと竹林の清遊にふけた。その一人劉伶（生没年不明）にこんな逸話がある。

劉伶はいつも酒びたりで気ままに振舞った。時には、家の中で着物をぬぎ素裸でいることもあった。ある人がそれを見て譏（あざわら）ると、劉伶は言った、「わしは天地を家と考え、家の中を幃（ふだ）だと思っている。君たちはなぜわしの幃の中に入ってくるのかね。」（『世説新語』任誕篇）

劉伶は、誇張表現を用いて、彼を批判する常識人を煙に巻く。ここで「幃」といった常識人をひるませる下世話な比喩が使われることによって、彼の反撃はいつそう効果を強めている。こうして天地を家に、家を幃に見立てる壮大かつ刺激的な発想によって、劉伶自身の存在もぐんぐん膨脹して巨大化し、細々した礼儀や規則に縛られた俗世（現実）のほうはこれと反比例して、みるみるみ

すばらしく縮んでいく。觀念の魔術というべきであろう。

劉伶のこの逸話は、自己存在を悠久の天地自然と一体化させ、無心にその大いなる生成のリズムに身をゆだねることをよしとする、道家思想の原型を示すものである。自然と一体化した自己存在は、等身大の現実世界の枠付けを凌駕して大きく伸び広がり、現実世界のほうは逆に縮み小さくなっていく。まさしく觀念による現実の超克にほかならない。劉伶ら竹林の七賢は、こうした觀念操作によって、悩みの種に事かかぬ魏末の転換期を、陽氣にあっけらかんと乗りきっていかうとしたのだった。危険な現実（人の世）なんて悠久無限の天地自然に比べれば、一時のシャッキリみたいなものだ、と。

このように自己存在を膨脹拡大させることによって現実、現世を卑小化する道家は、同様の觀念操作によって、夢と現実、生と死の境界をも取っばらおうとする。こうした考え方は、老子とともに道家思想の祖の一人に数えられる莊子（前三六九？～前二八六？）に、もつともはつきりとあらわれる。莊子にとって夢もまた現実であり、現実もまた夢であつた。有名な「胡蝶の夢」の寓話はこう展開される。

かつて莊子は胡蝶になつた夢を見た。ひらひらと舞う胡蝶である。なんとも楽しい気分になつて、自分が現実では莊子という人間であることも忘れはてていた。ふいに目がさめると、まぎれもなくやっぱり自分は莊子という人間にほかならない。しかし考えてみれば、自分が夢で胡蝶になつていたのか、それともさつきからひらひら舞っていた胡蝶が夢をみて、いま莊子と



胡蝶の夢（『程氏墨苑』より）

いう人間になっているのか、それはわからない。（『莊子』齊物論篇）

ここで莊子は、現実と夢を截然と区別する世間の常識に異議をとなえる。莊子の想念はゆるやかに広がり、夢と現実を混然と合体させるのである。

人間は有限の存在であり、結局は誰もが死という終末に到らざるをえない。この厳然たる事實は、古今東西を問わず、あらゆる哲学や文学の基本的テーマとして取りあげられてきた。莊子はこのテーマに対して、生と死を一体化、混沌化させる操作を通じて、宿命論を乗り越えようとする。「鵲巢問答」は、こうした莊子の死生觀を象徴的に示すものである。

莊子は旅行の途中、路ばたで完全に白骨化したしやれこうべをみつけた。莊子はその夜しやれこうべを枕にして眠りにつく。すると真夜中、しやれこうべが枕辺に立ち、何ものにも拘束されない死者の世界の楽しみを、莊子に縷々語る。「死すれば上に君なく、下に臣なし。亦た四時の事なし。

従然として天地を以て春秋と為す。南面王の楽しみと雖も過ぐることも能わざるなり」と（至楽篇）。

死者の世界では君主も家来もない。春夏秋冬、せわしい四季のいとなみもない。ゆつたりとして天地自然の悠久な時間を春夏秋冬とする。生者の世界で万人に君臨する王者の楽しみも、死者のこうした境地にはかなわない。と、髡髽に死者の世界の楽しみを、誇張して語らせることによって、莊子は、死がなんら恐るるに足りないことを明らかにする。このややグロテスクな髡髽問答以外にも、『莊子』の中には、妻や友人の死に際して、いつこうに悲しむようすもなく、騒々しく祭のように樂器を鳴らし歌をうたう人々の姿が描かれるなど、死を生の完結として悲しむことを拒否する態度が見られる。莊子にとって、生も死も絶え間なく生成と消滅を繰り返す天地自然の大いなる連鎖の一環にすぎないのだ。こうして人の生死を宇宙の運動のリズムと一致させることによって、莊子は死への恐怖をも克服するのである。

李白の誇張表現、劉伶のふんどうし 幘談義、そして莊子の「胡蝶の夢」や「髡髽問答」に共通して見られる思考様式は、自己存在が比喩的に極端な形で強調され膨脹拡大された結果、等身大の現実世界が縮小されたり、あるいは夢や死といった非現実と現実の生の境界がとりはずされ、非現実が現実の中へ流れこんできて、相対的に現実そのものの比重を軽くする、というものである。

こうした思考様式は、キリスト教世界のような唯一神、絶対神が存在しない中国世界で、有限の生命しか持ちえない人間存在が、その宿命の重さに押しつぶされることなく、人の世の悲しみや憂いを超えて生きていくために、編み出されたものにほかならない。道家思想では、人は神の下

僕となつて救われるかわりに、自ら大らかに楽しく天地宇宙と共生することによつて救われようとするのだ。

このような道家思想の伸縮自在のダイナミズムは、いうまでもなく、「修身・齊家・治國・平天下」と着実に段階を踏み、人間存在と現実世界の関わりを有効性のもとに正確に対応させる、儒家思想のリアリズムに対抗して生まれたものだった。「怪・力・乱・神」すなわち知的に認識できない現象に対して冷淡な儒家は、あくまで生真面目に既定の等身大の世界像の枠の中に踏みとどまり、けつして飛躍しない。ここでは人も世界も伸縮することはない。こうした儒家の固定軸にインパクトを与えるものとして、道家の伸縮のダイナミズムは、長らく作用しつづけてきたといえる。

さて、いままで主として、中国世界における道家の自己拡大↓世界縮小、のパターンを取りあげてきたが、これとは逆の、自己縮小↓世界拡大、のパターンも、道家のそれほど数多くなく、また必ずしも中国に固有の発想とはいえないがたい要素もあるけれども、けつして見られないわけではない。唐代伝奇小説の一つ「南柯太守伝」(李公佐作)は、その代表的なものである。これは明代の有名な戯曲家湯顯祖(一五五〇～一六一六)によつて、戯曲化されてもいる(「南柯記」)。ストーリーは、あらまし以下のように展開される。

淳于棼という人物の家の庭に大きな槐の木が一本あった。あるとき、淳于棼は泥酔してしまい、二人の友人が彼を助けて家へ連れ帰り寝かしつけた。友人たちはそのあとしばし彼の家に残り、馬にまぐさをやったり足を洗ったりしていた。酔った淳于棼は枕につくと、たちまち夢見心地になつ